

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)

じょうのり ひでお
上乘 秀雄

のどちょう
【石川県能登町】

選定年: R1年
(個人賞受賞)



概要

- 故郷の里山を再開発して子どもたちが自然体験や環境学習ができる場を創ろうと、自然体験村「ケロンの小さな村」を創設。
- ビオトープやツリーハウスを整備するなどして子供達への自然体験を行うほか、自家生産の米を米粉にしてパンやピザを販売するなど6次産業化にも取り組み、大人の来客も取り込み地域に賑わいをもたらす。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況

- 自然体験村「ケロンの小さな村」における自然体験や環境学習、自家生産の米粉や野菜を使ったピザ作り体験などでの子どもの来村者数は年間4,000人。大人も合わせると5,000人(H30)。地域の活性化にも貢献。
- 自らの取組を絵本にして出版。小学校等での読み聞かせ会や原画展の参加者は年間2,000人(H30)。



里山内に設置された旗

選定直後の状況

- 受賞後、町長や金融機関に報告の表敬訪問を行い、今後の活動について激励があった。
- ディスカバーのロゴマークがはいったのぼり旗を里山内に配置。地域の利用者から反応をいただくこともある。
- 地域の広報誌に地域活性化の事例として取り上げてもらったこともあり、総務省の「令和4年度ふるさとづくり大賞」に推薦され、個人表彰を受賞。

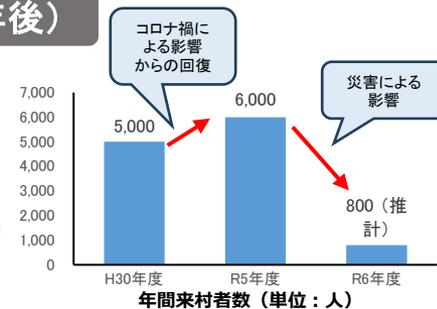


施設内に飾られた表彰状等

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- R6年1月の能登半島地震により崩壊した橋や施設等の修復を最優先に行っている。少しでも早い復旧と、コロナ禍以前を上回る来村者と売り上げを目指している。



- 孫が後継者になったことで、事業承継のために収益化について考えるように。災害からの復興と収益化の二本柱で活動を行う予定。
- 災害ボランティア団体から譲り受けたキッチンカーでイベント等に参加し、自家生産の米粉パン等を販売。



被災した施設



米粉パン等を販売するキッチンカー

今後の展開方向

- 里山内に宿泊施設を建設し、宿泊部門での利益化を目指す。
- 里山内に農業ハウスを建設し、水耕栽培にも挑戦。
- 直売所兼休憩所を設置し、米粉パン等の売り上げアップを目指す。



くらかけさんろく

鞍掛山麓千枚田保存会【愛知県新城市】

しんしろ

選定年:R1年

概要

- 棚田の保全活動、棚田米を原料とした「千枚田五平餅」の販売、小中学生を対象とした「千枚田絵画コンクール」、地元小学児童への稲作体験を実施。
- 自然豊かな景観と生物多様性に富んでおり、世界各国の農学研究者の視察受け入れ等、外国との交流にも取り組む。

選定年(R1年) 前後の状況

選定時までの活動状況

○H22年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の誘致に貢献。

○COP10開催を機に、ベトナム、中国など海外から中山間地の米作りに関する農業視察が増加。

○地域の教育機関と連携した農業体験学習や、企業と連携した社員研修・ボランティア活動を積極的に受け入れ。

○収入確保のため、千枚田で生産した米を株式会社丸八製菓(愛知県豊橋市)へ出荷し、「千枚田五平餅」を製品化。



地元小学校の野外学習



千枚田五平餅

選定直後の状況

- 選定後2年間で、新聞掲載2回、テレビ放映6回。
- 小学生向け道徳の教科書「明るい心」へ全6ページにわたり掲載。
- 新型コロナウイルス感染症がまん延すると訪問者は急激に増え、休日は約2,000人が訪れた。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

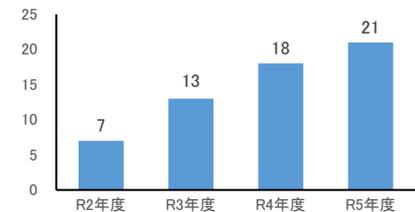
○都市近郊の住民が会員となり、約25名(団体)で水稻の栽培や保全活動を行っている。令和4年に「四谷の千枚田」として「つなぐ棚田遺産」に選定されたことで、千枚田の保存継承に参画する企業が増加。

○千枚田では都市住民との交流イベントとして農道沿いに1,500本のロウソクを灯す「お田植え感謝の夕べ」、アマチュアミュージシャンによる天空のコンサート、餅つき、イノシシ汁の提供を行う「収穫感謝祭」等、様々なイベントを開催し、年間約2万人が訪れている。

○世界各国の農学研究者等が視察に訪れており、国際協力機構(JICA)の現地見学会も実施されている。



「お田植え感謝の夕べ」の様子



棚田でのイベント開催回数(単位:回)

今後の展開方向

○高齢化が進み、地元の地権者だけで耕作・保全を行うことが難しくなっているため、都市近郊から来る人々等と協力し、景観と自然環境を守っていく。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)

きたがわ しずこ たきちょう
北川 静子 【三重県多気町】

選定年:R1年



概要

- 地元農産物を活用した農家レストラン、加工所を運営。
- 農村の歴史・文化で地域を盛り上げ、次世代へ継承していくため、地域全体を巻き込んだ農村体験・イベントを実施。

選定年(R1年) 前後の状況

選定時までの活動状況

○高齢化や後継者不足の中、農村で生まれる産物・豊かな文化・お年寄りの持つ技術を活かそうと地元女性と共に有限会社を設立。



地域内外の児童への食育の様子

○農家レストラン、加工所などで地元農産物を使用した料理や商品を生産するほか、大豆などを使った料理体験などを通じ、農村の文化や技術を継承。



地域全体を巻き込んだイベントの様子

○売上の6割を地域に還元する「コミュニティビジネス、地域貢献・地域密着型事業」を展開し、地域の団体と協力して地域活性化に貢献。

選定直後の状況

○選定年1年間で、新聞掲載4回、雑誌掲載1回。



地元の保育園児・小学生・高校生と共同開発した「豆サブレ」

○選定後に視察団体が3回訪問。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

○高齢化と後継者不足により廃業した地域内の老舗こうじ屋と和菓子屋の味、技術を継承。

○生産者の高齢化により食材の入手が難しくなっていたことから、新たに農業部門を立ち上げ、農作物の栽培にも取り組んでいる。

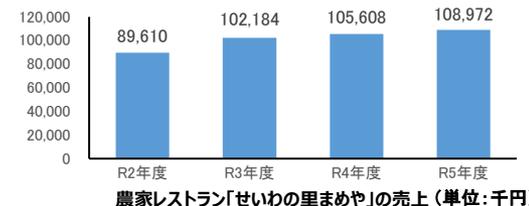
○選定後5年間で、新聞掲載17回、雑誌掲載9回、テレビ放映3回、視察受入11回。



技術継承したこうじを使った味噌



農業部門で実施した収穫体験の様子



今後の展開方向

○引き続き農村の文化や技術を継承していく。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



農事組合法人かなん ^{かなんちょう} 【大阪府河南町】

選定年: R元年

現在の取組概要

- 町内学校給食センターや幼稚園、福祉施設等への農産物や味噌の納入や、町内小学校も5年生に食農授業を実施。
- 地場産農産物を使用したお餅、惣菜、米粉パン、ジャム、味噌等の加工品を開発し、販売。

選定年(R1年) 前後の状況

選定時までの活動状況

○町内の小学校5年生に対し農業の現状や野菜の栽培・出荷について出前講座や小中学校の社会見学、農業体験自習などの受け入れを行う等食農教育に積極的に取り組む。

○リニューアルで設置した調理室を活用し、H30年度より親子等を対象として、道の駅かなんで販売している農産物を使った料理教室を開催(H30:5回、延べ71名参加)

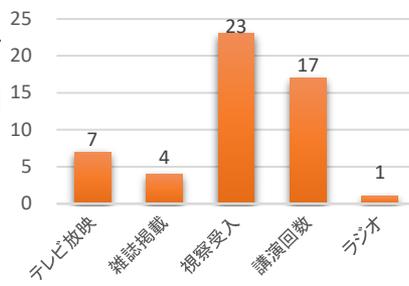
○大阪府独自の伝統野菜「なにわの伝統野菜」の栽培・出荷販売にいち早く取り組み、直売所で買えるとして大阪府内の飲食店等で利用される。地方創生加速交付金を活用し、大阪市立大学と連携し、特産である浪速の伝統野菜の栄養等の研究を行った。

選定直後の状況

○R2年、R3年テレビ放映合計回数7件

○R2年からR4年視察受け入れ合計回数16件

○R3年に放映された「発見食遺産」にて、なにわの伝統野菜「勝間南瓜」がクローズアップされ、番組内で当直売所の農家の作ったレシピが食遺産に認定。



【情報発信の取組】

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 温州みかんを使用した「かなんのみかんぼんず」や、米粉を使用した米粉のそうめんやスパゲッティを販売。また、野菜を活かす為のカレーベースの新商品開発を行っている。
- 近隣農家のいちご狩りの受付や、ふるさと納税の返礼品として、いちごを活用している。
- 大阪市内の百貨店及び町内のスーパーにおいて、道の駅コーナーでの販売を行っている。



富田林青年会議所と共催：食農体験



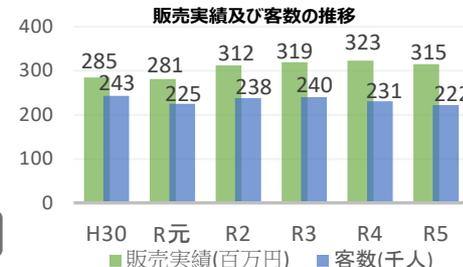
いちご狩り



かなんのみかんぼんず



近鉄百貨店にて道の駅ブース



今後の展開方向

- 地場産農産物を活用した商品の開発、喫茶スペースで季節に応じた商品提供、調理室兼会議室を利用した料理教室や食農教育、加工施設を活用した商品開発や製造委託など、道の駅に足を運んでいた機会を増やして販売実績に繋げる。
- さらに新規農業者の獲得・育成を目的とした取組も視野に入れている。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



うおのや

おおだ

株式会社 魚の屋【島根県大田市】

選定年: R1年
(グランプリ)

現在の取組概要

- 島根県産天然わかめを中心に扱い漁業者の所得向上、隠岐諸島を中心とした離島振興。新たな産地(島根町)が加わり、原料供給や商品生産を拡大。これまでの販路に加えてドン・キホーテ、紀ノ国屋、久世福商店等に販売を拡大。
- 温暖化によるわかめの葉と茎の割合の変化に対応して商品構成を変更(スープ類の割合を増加)。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況

- 新商品の開発販売
国内市場に1%しか出回っていなかった天然わかめを使用したスープやカットわかめ等の新商品を開発・販売。需要を拡大してわかめ漁を復活させた。
- 漁師の所得向上
海岸で漁師が刈り取った天然わかめを買い取っている。漁期の3月~5月末までこの間の漁師の所得は午前中の操業だけで平均43万円/月になり、年金受給者に特に喜ばれ生きがいとなる。
- 農福連携による所得向上・地域の見守り
わかめを葉と茎に分ける処理を13か所の障がい者施設に委託し、施設の加工賃の受託単価を通常の約2倍に設定している。また、社内では一人暮らしの高齢者24人にマイペースでの作業をお願いしており、安否確認にもつながっている。



天然わかめの商品



刈り取られた天然わかめ

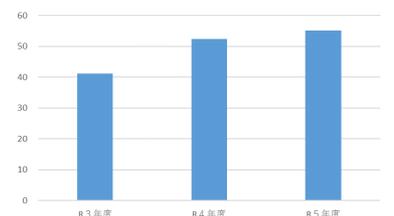
選定直後の状況

- 新型コロナウイルス感染症拡大に見舞われたが、スーパーを中心に商品を展開していたため、巣籠り消費が伸びて売上は増えた。
- 地球温暖化の影響と考えられる、わかめの葉と茎の割合の変化を考慮し、商品をスープ中心に変化させた。
- グランプリ受賞を関係者が喜んでくれたが、中でも漁師が一番喜んでくれてモチベーションが上がった。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 漁師の人数も150~200名ほどにまで増え、漁師からの購入金額は選定当時の3千万円/年から1億5千万円/年に。高齢者や障害者の安定した雇用の場は縮小しつつも維持。
- これまでの販路に加えてドン・キホーテ、紀ノ国屋、久世福商店等に販路を拡大。
- 温暖化によるわかめの葉と茎の割合の変化に対応して商品構成を変更(スープ類の割合を増加)。
- 天然わかめの商品(最中スープ)が2023年ジャパン・フード・セレクション第64回金賞を受賞。



天然わかめ商品売上推移(単位:千円)



刈り取りから帰ってきた漁師

今後の展開方向

- 引き続き「漁師が主役」という考えで事業に取り組む。
- 島根県はわかめの産地としては新しいため、定着を図る。県産の他の農産物と組み合わせた商品を開発・販売する。
- 生産地として離島を抱えており、高騰する燃料・資材費に対応するため商品への価格転嫁が急務。消費者や小売業者のニーズにあった商品開発を行い、あわせて適正価格での販売を目指す。
- 需要や取引する加工施設の動向に応じて産地を開拓する。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



じょうけんじ きたひろしまちょう
浄謙寺【広島県北広島町】

選定年: R1年

現在の取組概要

- 地場産物を使った新鮮で美しい料理をイタリアン精進料理や説法を通して身も心も癒される体験を提供。
- 広島県原産のごきねぶり小豆を使った最中を町内の和菓子店と協力して開発・製造。
- 広島アンデルセンと連携して野菜以外にも芸北の食材を取り入れた食事会(四季ごとの会のうち「夏」の会担当)を開催。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況

○食文化・仏教文化の継承

食を通じ伝統的な仏教文化や日本食文化に触れる機会となるよう、読経や説法などの体験とともにイタリアン精進料理を採用。



法話

○地産地消の取組

料理はスタッフの家庭菜園や近隣農家から仕入れた地元の新鮮な朝採れ野菜等を使用。



二の膳 野菜盛り

○地域住民の協力

地域に住む定年後や退職後の再雇用者が多く地域の雇用創出に貢献。料理の仕事を通じ新たな才能を開花させるなど自己実現の場として機能。自ら栽培し調理した野菜についてお客様と会話が生まれ、情熱が伝わり感動を与えている。参加者からは身も心も癒されたと好評で約半数がリピーター。

○インターンの受け入れ

精進料理の調理や配膳、農作業を1週間～2週間の期間で受け入れている。大学生を中心に寺の宿坊に泊まり込みで働いてもらっている。

選定直後の状況

○コロナ禍も隔月営業

コロナ禍においては個人客の利用はほとんどなくなったが地元旅行会社によるバスツアーは継続され営業を続けられた。それによりスタッフの雇用を続けられ、メンバーは変わっていない。

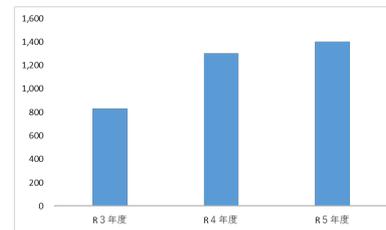
○ごきねぶり小豆を使用した和菓子の開発・販売

2020年に地域の和菓子屋と共同で広島県在来種の希少なごきねぶり小豆を使用した最中を開発・販売。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 地場野菜をはじめ瀬戸内レモン等の広島野菜も取り入れたイタリアン精進料理を提供。受け入れ人数を増やしている。
- 広島県原産のごきねぶり小豆を使った「ごきねぶり最中」を町内の和菓子店と協力して製造。百貨店等に販売。潜在的需要は多く、お中元やお歳暮に人気。
- 広島アンデルセンと連携して食事会を開催。
- 料理教室や出張料理にも着手。



イタリアン精進料理の来客数推移(単位:人)



抹茶体験

今後の展開方向

- 少人数限定のコースや、出張料理の充実を検討。
- 旅行会社とイタリアン精進料理に加え地域の自然で遊べるような体験を交えたウェルネスツアーを企画し、インバウンド対応も計画。
- 野菜だけでなくジビエや川魚、牛乳といった芸北の食材を使い芸北の食材を知ってもらう機会を作る。また、宿坊に注力し、泊まれるお寺レストランを目指す。
- 地域の方と協力しながらごきねぶり小豆の作付け、収穫の安定化を図る。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



うわじま
愛媛県立宇和島水産高等学校
水産食品研究部「フィッシュガール」【愛媛県宇和島市】
うわじま

選定年: R1年

現在の取組概要

- 生徒主体のマグロの解体ショーで愛育フィッシュ(愛媛で愛情込めて育てた魚)を全国でPR。5年度からの愛媛県海外販路開拓企業連携体という輸出協団体にも加わり、アメリカやアジア等の海外でも開催。
 - 自治体や企業の依頼を受け商品の開発(監修)や、県内外の高校とコラボし生産する農産物や県産「媛スマ」を使用した商品を開発。
- ※ 「媛スマ」は愛媛県産の養殖スマの総称。天然のものは漁獲が少ないため、お店に並ぶことがほとんどなく「幻の高級魚」と言われる希少な魚。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況

- マグロの解体ショー
国内外の百貨店やイベント等で、体よりも大きなマグロを解体。加えて販促のMCTーク(養殖マグロや愛媛の水産業に関する解説)も全て「生徒自ら」行う。集客力の高い取組。実施店舗への調査結果では、96%で集客増、89%で売上増の効果。



ハワイでの解体ショー

- 製品開発
「ブリ大根缶詰」、「鯛めしの素缶詰」など様々な製品を開発・販売しており、大日本水産会のHACCPを取得し、FDAIに施設登録等を行った。国内初となる「高校の施設で製造した加工食品の対米輸出」を行った。
- 産官学の連携
地元の水産会社が高い技術で魚を育成し、愛媛県が百貨店等との催事の折衝を行い、フィッシュガールがマグロ解体ショーを通じ様々な愛育フィッシュのPR販売を担う。産官学が連携して国内外の消費者に愛媛の養殖技術の高さや美味しさを伝える。

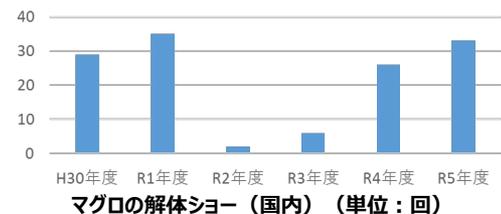
選定直後の状況

- コロナ禍で、集客目的のマグロの解体ショーは一時少なくなったが、県や漁協等の協力を得て実施。技術は生徒同士の教えあいにより受け継いでいる。
- コロナ禍を転機とし、校内製造が主だった商品開発を、地域の協力企業が製造・販売する商品の開発(監修)の取り組み始めた。
リモート会議を重ねて「はもごはん」「なめとこにじますアヒージョ」の商品を開発。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 生徒主体のマグロの解体ショーで愛育フィッシュを全国でPR。愛媛県海外販路開拓企業連携体という輸出協団体に昨年度から参加したり、JETROとの関りもできたりしたことで、アメリカやアジア等の海外で地元の食品をPRする機会にも積極的に参加。
- 自治体や企業の依頼を受け商品の開発(監修)や、県内外の高校とコラボし生産する農産物や県産「媛スマ」を使用した商品を開発。
- 県の愛育フィッシュのPRや販売促進、地元水産事業者や販売店の売上・集客増、将来を担う人材確保など、産官学3者がWinWinWinの関係構築。10人ほどだった部員も20人と倍増。



監修した商品の販売促進

今後の展開方向

- 集客力が高く注目を集めるPR活動であるマグロ解体ショーを引き続き実施。
- 商品の開発製造では、首都圏に広める目的でレシピを開発中。缶詰だけでなく冷凍食品、ベーカリー、総菜のレシピ作りも行う予定。自校で製造する缶詰はいずれEUへの輸出を考えている。
- 地域に誇りや愛着を持つ若者、アントレプレナーシップ(起業家精神)を育み、地域貢献できる人材の育成を目指す。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



農業生産法人 株式会社ミヤモトオレンジガーデン

【愛媛県八幡浜市】

選定年: R1年

現在の取組概要

- グローバルGAPを継続更新し柑橘を生産。「GAP認証取得支援システム」を愛媛県農業大学校、県内外の農業高校や農家に提供。
- 令和5年に「農業用ドローンによる柑橘園での農薬自動散布体制」を国内で初めて確立。普及も兼ねドローンスクールを開校。
- 柑橘の加工品を量産、全国各地で販売。6次産業化のみならず、1次+1次+2次+3次の7次産業化による商品開発にも挑戦。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況

- グローバルGAPとASIAGAPIによる柑橘栽培と高付加価値販売
みかん・かんきつ類は4.5haの園地全てでグローバルGAP及びASIA GAP認証を取得。大手量販店や百貨店等と継続的な取引関係を構築。
- 「GAP認証取得支援システム」の開発とGAP普及
生産者が使いやすく、より安価に取得可能な「GAP認証取得支援システム」を開発。県内の農業高校・農業大学校に提供しグローバルGAP取得に貢献。セミナーでの講演やGAP経営研究会の開催。
- 調味料「塩みかん」の加工販売



開発・販売された数々の商品

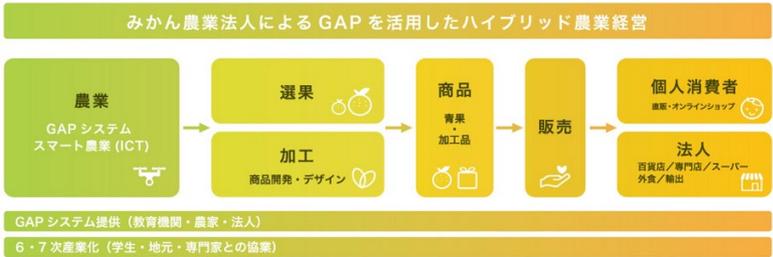
選定直後の状況

- 新商品「塩みかん寒天ゼリー」「さわやか旬果ゼリー・伊予柑」「塩みかんマリネの素」をリリース。
- 愛媛県産品の付加価値を高め販売するため、東京第一ホテル松山、株式会社愛南サン・フィッシュ、県立八幡浜高校など地元の企業や学校等とパートナーシップ協定を締結。
- みかん・柑橘類の香港への輸出開始。
- 媛小春で県内最大規模の生産量を実現。
- 令和2年度6次産業化アワードで食料産業局長賞と学生応援賞をW受賞。令和3年度中国四国地域未来につながる持続可能な農業推進コンクールGAP部門で中国四国農政局長賞を受賞。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- グローバルGAPは継続して更新中。「GAP認証取得支援システム」を愛媛県農業大学校や県内外の農業高校、農家に提供。
- 農業ドローンでは柑橘類では初めて自動飛行による農薬散布技術を確認。ドローンスクールも開校し、ドローン操作や農薬散布技術を普及。
- 自社内で加工場を立ち上げ加工品の自家生産を推め、柑橘の加工品を量産、全国の百貨店や高級スーパーで販売。
6次産業化のみならず、1次+1次+2次+3次の7次産業化による商品開発にも挑戦。



農業生産法人 株式会社ミヤモトオレンジガーデン の経営の姿

今後の展開方向

- 現在の事業を継続しながら、企業理念である「革新的な農業経営で最良のウェルビーイングを追求し、たくさんの喜びと新しい価値を創造する」ことの実現を目指す。
- 「グローバルGAPの推進」「アグリテック(先進の機械・技術)の活用」で持続可能な農業に挑戦し、「地元食材と地元関係者との連携による商品開発」で、みかんの新しい価値を創造する。

ディスカバー農山漁村の宝 フォローアップ(優良事例の状況)



にい きよ あなん
新居 希予 【徳島県阿南市】

選定年: R1年

現在の取組概要

- 伝統米の栽培や阿波晩茶の生産、地域農産物を利用した6次産業化により伝統食材の継承・復活・研究に取り組む。
- コロナ禍で止めていた食育体験を再開。食育たより等を通じた学校の食育のサポートや、YouTube等のSNSによる情報発信。
- 食育カードゲーム作成や大学や高等専門学校など新たな分野と連携など新たな取組(研究や教育の支援)を開始。

選定年(R1年)前後の状況

選定時までの活動状況



子ども達との田植え

- 伝統の継承
伝統黒米 弥生紫を独自に栽培し、「100年前の米 徳ばん」を復活。生産者が激減し耕作放棄されていた茶畑を復活させ阿波晩茶の生産を開始。その他、お米と麦のみで作る甘味料「米飴」の生産や「徳ばんで作る昔の甘酒」の復活など、途絶えかけていた食材の継承・復活・研究を実施。
- 教育機関との連携
保育園、幼稚園20校と連携。龍谷大学の農業体験の場を提供。
- 食育・教育
伝統食材の提供や、定木を使う昔ながらの田植えや石包丁を使った稲刈りなどの農業体験。生産者が書く毎月の食育たよりの発行等を行い学校の食育をサポート。
- 広報活動
行政、テレビ・ラジオ放送局、農林水産業に携わる企業と連携し、生産現場を知っているからこそ伝えられる農林水産物の情報を発信。また、メディアの番組コーナーや情報発信を企画・監修。

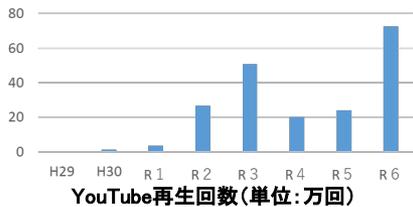
選定直後の状況

- 令和元年に参加者が1,500人まで増えた食育体験は、コロナ禍に見舞われ、2~4年度は実施ができなかった。
- しかしながら、食育たよりの発行数を増やし、YouTubeによるリアルな農業、伝統米の栽培、阿波晩茶の生産、農業、作物、生産者の紹介等の動画の配信を増やすなどコロナ禍に応じた情報発信に努めた。
- 在来茶葉を使用した阿波晩茶の生産を開始。

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 耕作放棄地の活用や地域の伝統を伝える農産物や農産加工品の生産を行うことにより、途絶えかけている食材を継承・復活・研究。
- コロナ禍で止めていた保育園・幼稚園への食育体験を再開。令和5年に食農教育協会を設立し、なかがわ野菊の里でそれまで培った農業分野と食と教育を組み合わせたカリキュラムによる活動を開始。
- 食育たよりの発行部数が増加。YouTube等SNSによる情報発信。
- 令和6年に食農教育ゲームを作成。生産者の日常をカードゲームにし、子供達が生産者の労苦や喜びを体験でき、生産者は作物の販売促進にも活用できる。
- 令和2年から大学の阿波晩茶の研究に協力。さらに、有識者の協力を得て「阿波晩茶保存研究チーム」を発足し代表を務める。



阿波晩茶を作っている時

今後の展開方向

- 伝統食材の継承・復活・研究、食育体験などの活動を引き続き実施。
- 耕作放棄地のさらなる再生に取り組み、阿波晩茶の生産者を増やし、在来茶葉による阿波晩茶の生産量を増やす。
- 阿波晩茶保存研究チームや、食育教育協会における活動を推進。
- 紙媒体・テレビ、ラジオ、新聞、YouTube、各種SNSを活用した情報発信で伝統的な食材のファンをつくる。伝統食材クリエイターの活動を拡大。農業と食材に関する執筆の開始。



すみやま棚田守る会【佐賀県伊万里市】

選定年: R1年

概要

○過疎化などにより荒廃した棚田を整備し、田んぼや畑を身近に感じる、農のある暮らしを「田んぼテーマパーク」という形で実現。
 ○学生、企業、地域住民が連携し、様々な取組を実施することで、交流人口の増加に寄与。

選定年(R1年) 前後の状況

選定時までの活動状況

○荒廃した棚田を8年がかりで整備し、景観やオーナー制度による田植え及び収穫体験を実施。
 ○CATV・地元酒造会社と連携し「純米吟醸すみやま」を製造販売。ふるさと納税の返礼品に選定されるとともに、仏の日本酒品評会で金賞受賞。
 ○大学と連携した棚田での農業体験をテーマとした研究や水力発電によるイルミネーションなど、多様な者と連携した取組を実施。



棚田保全活動で田植え体験



水力発電を活用したイルミネーション

選定直後の状況

○佐賀県知事に選定を報告後、県が作る冊子で取組が紹介され、同じく選定を報告した伊万里市長からは「持続可能な地域モデルになる」と評価をいただく。
 ○西日本新聞社から取材を受け、選定に関する記事が紙面に掲載。
 ○県内外から10件の視察を受入れ。

「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に すみやま棚田守る会が選定!!



選定証授与式に参加。



みんなでもらった認定証です!
 心と心の繋がり、絆ができました!

佐賀県の冊子で選定された取組を紹介

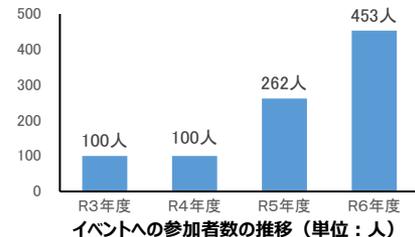
現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

○選定後、すみやま棚田守る会を支援するための任意団体「すみやま農らいふ」が設立され、3企業・3団体が設立会員として参画。また、イベントへの参加や運営、SNSで応援をする一般会員・学生会員・賛助会員には45名以上が登録している。
 ○連携する企業や団体、支援者が増えたことで、これまでの棚田保全や田植え体験に加え、棚田キャンプや虫取りイベントなど様々な取組を実施。
 ○令和5年度は棚田でのイベントを6回開催し、延べ262人が参加。令和6年度は9回のイベントを開催し、参加者数は延べ453人となった。



稲わらと田んぼの土でクッション性抜群



今後の展開方向

○日本各地の棚田地域と同様に高齢化が進み、担い手不足が深刻になっているが、炭山の棚田にある豊かな自然と田んぼをそのまま使って、子どもから大人までが楽しめる場、様々な人が交流する場を提供していくことで、魅力ある地域づくりに取り組む。



概要

- 地元の自然や資源などを最大限に活かして、農林業、エコツーリズム等を合わせた取組を行い地域を活性化。
- 集落ボランティアセンターでは、世界農業遺産の高千穂郷・椎葉山地域の集落支援や全国各地の災害支援も実施。

選定年(R1年) 前後の状況

選定時までの活動状況

- 季節に応じて子供を対象とした自然体験のイベントを多数開催。青少年の健全育成のための自然を活かした環境教育にも注力。
- 地元農家の生産する米をブランド化し、付加価値をつけて販売することで、地元農家の所得向上に貢献。



川遊びイベント



ブランド米「四億年前の大地」

選定直後の状況

- 選定以降、地域での取組が評価され、「日蔭棚田」及び「鳥の巣棚田」が第2回「つなぐ棚田遺産」に選定。棚田振興に貢献した団体として感謝状の贈呈を受けた。



日蔭棚田の全景



鳥の巣棚田の全景

現在の状況及び今後の方向

現在の活動状況(5年後)

- 地元の学校と連携し、定期的に集落ボランティアへ参加をしてもらい、県外の大学生等のボランティアも受け入れる。
- 串間市のNPO法人との連携では、海の厄介者オニヒトデを駆除し、堆肥化。その堆肥を使って玉ねぎ、大豆を栽培。玉ねぎは「鬼オン」というブランド名で販売。
- 子供を対象とした自然体験イベントについては、県内外から毎回定員を超える申し込みがあり、常にキャンセル待ちの状態。令和6年度は三年ぶりに五ヶ瀬町のスキー場がオープンすることもあり、スキー教室には多くの参加希望者が見込まれる。



大学生のボランティアと鳥の巣棚田でのウモロコシ栽培の様子



日蔭棚田での大豆の種蒔きの様子

今後の展開方向

- ここ数年で、高齢により離農する農家が増えてきており、耕作放棄地対策が急務となっている。対策の一つとして、自然農法(菌ちゃん農法)に新たに取り組んでおり、地域の高齢者と若者が一緒に生きがいを持って生活できる地域作りに取り組む。